経済および経済学の本義について（後篇）
——経済学批判の存在理由とその展開——

山　本　二　三　丸

まえがき
1　「経済」の語義
2　「経済学」の意味内容
(1)　福田徳三氏の解説
(2)　古典学派経済学の体系
a）アダム・スミス
b）ディヴィッド・リカードゥ
c）古典学派経済学の変質と俗流化……
（以上，第42巻第3号所載）
3　マルクス＝エンゲルスによる「経済学批判」
(1)　エンゲルスによる批判
(2)　マルクスにおける「経済学批判」
a）著作「経済学批判」体系の成り立ち
b）「経済学の体系」にたいして
c）「三位一体的定式」にたいして……
……（以上，第42巻第4号所載）
4　科学的経済学の骨格
(1)　経済学の簡単な定義
(2)　歴史科学
(3)　理論体系
(4)　発展法則
5　貨幣物神の支配と奴隷化
6　「経済学批判」の新たな展開の必然性
簡単な要約
あとがき……（以上，本号所載）

4　科学的経済学の骨格

ここにことさら「科学的」という規定を加えてあるのは，「学」という文字がついていればそれは「科学」なのだと早や合点する向きも甚だ多く，また「科学」の名に値しないような貧弱な理論を並べただけのものを「○○学」と銘うって，あたかもそれがりっぱな「学問」であるかのように思いこませるといった「学者」も，この国には少なくないからである。大学での講義科目は，「科学」の内容に欠けているものが少なくないが，そのほとんどすべてが「○○学」というたいへんりっぱな名称をつけられている。誇大妄想的迷語がえてしてはばを利かすこの国とちがって民主主義の板についている先進的欧米諸国では，講義の名称に「学」（die Wissenschat, sciencc）という文字をつけることはほとんどなく，その内容通りに平明・正確な Lecture または Study という言葉が使われているし，企業経営にかんする講義課目についても，簡単・明瞭な Accounting もしくは Management でこの上なく適切に示されている。ところが，この課目の名称は，この国では，たちまち「経営学」などという，もったいぶったものに変えられてしまっている。資本主義社会におけるほとんどすべての企業が資本による最大限の利潤の搾取＝取得のためのものであり，そのためにこそ Accounting・Managementも不可欠の技術として研究・応用されるものだということは，中学生でも知っているような一個の常識である。ところが，誇大妄想的思考癖のいたすところであろうか，この国には『科学と

しての経営学』という表題をいただいた著書まで現われているのである。この著書の実体については，私はさきに別稿[15]で詳細な検討を加えたことがあるので，その内容についてここでふれることは控えるが，完全に科学でないものまで科学と銘うって売り出すことができるほど，この国での科学という用語についての濫用は甚しいものがあるのである。

(1)　経済学の簡単な定義

この経済学とは，スミスのいわゆる「政治経済学」ではなく，客観的な経済法則を論究する科学としての経済学（political economy）である。この科学としての経済学をはじめてつくりあげたのがほかならぬマルクスとエンゲルスであり，その結実がまさしく世紀的労作『資本論』として示されていることは，いまさら説明するまでもない。謙遜家エンゲルスは，つね日頃「主役はマルクそのひとであって，自分は第二ヴァイオリン奏者にすぎない」と語っているが，そのエンゲルス自身がどんなに傑出した「第二ヴァイオリン奏者」であるかは，さきに見た彼の労作『経済学批判大綱』そのものが実証して余りあるものといえよう。この「第二ヴァイオリン」の名手が，たんに経済学の分野ばかりでなく，むしろひろく社会科学および自然科学の分野にわたって，厳密・難解な科学的理論の内容を一般にわかりやすく平易・正確に説明し宣伝するという大切な仕事の面でも抜群の才能を身につけていたことも，よく知られているところである。

「経済学とは，どういう学問であるか？」ということについて，まずこの「天才的解説者」エンゲルスの助言を借りることにしたいと考える。つぎにかかげるのは，彼の不朽の名著『反デューリング論』のうちの「第2篇　経済学」の「1　対象と方法」の冒頭に出てくる命題である。

「経済学〔die politische Ökonomie〕は，もっとも広い意味では，人間社会における物質的生活資料の生産と交換を支配する諸法則についての科学である」(Marx-Engels, Werke, Bd. 20. S. 136, 邦訳大月版152ページ)。

この経済学にかんするエンゲルスの定義はきわめて簡単で自明のことを述べたまでのことのように思われるかもしれないが，しかしこの定義のうちには，きわめて奥深い意味が内蔵されていることをよくよく考慮しなければならない。これからあと「科学的経済学の骨格」を成す

---

(15)　拙稿『科学としての経済学』(完)（愛知大学法経済論集経済・経営篇Ⅰ第100号，1982年1月)。私は，この論稿の(1)から(7)まで通して科学としての経済学の本質について論究したのち，その（完）で『科学としての経営学』と題された著書をとりあげて，その内容がマルクス主義の基本的観点からどんなに逸脱したものかを究明したうえで，「著者は，科学という主題の言葉をば，どういう意味において用いられているか？」という質問をかかげて，明確な解答を要請したのであるが，今日にいたるまで一言の答えにも接しない。こうしたことは，当の著者自身が，声を大にして「科学的社会主義」という言葉を――ただ言葉だけを――ふりまいているだけに甚だ遺憾なことである。資本主義社会の企業・経営はもれなく賃銀奴隷の搾取の上に成り立ち，最大限の利潤の追及に汲汲としているのに，その資本家様のために科学を授けるとは，またなんとたいした「科学的社会主義」の信者であろうか。

ものとして取りあげられるはずの各項目の意味内容はすべて，上の簡単な定義の内蔵するところを順序立てて引き出し敷衍することによってはじめて明確にとらえられるものだといってよいのである。と言っても，それだけでは簡単に首肯されえないと思われるので，これらの関連についてあらましの筋道を説明しておかなければならない。

右の定義のうちで，第一に決定的な中核的意義をもっているのは，いうまでもなく，法則（Gesetz）という言葉である。それは，さきに古典学派について見たような，「生産物の生産・分配の原理」といったものとは全く異なる。それは，物＝生産物がどのように生産され分配されるかという，物についての法則ではけっしてなく，人間がいかに生産し分配するかという，人間についての法則なのである。「生活資料の生産と交換」という文句のうちの「生活資料」つまり「富」そのものに目を奪われるならば，法則が，人間社会を支える人間の生産および交換を規制する客観的な自然法則であることは，その目から落ちてしまうのである。

生産とは，簡単にいえば人間が主体としてその人間労働力を支出し，生産手段（労働対象と労働手段）に働きかけて，労働対象を人間にとって有用な形態のものに変えることであり，人間自身による人間労働力と生産手段との融合であるといえる。

それゆえ，「生産を支配する法則」とは，労働力の担い手である人間と生産手段との――技術的ではなく――社会的な結びつきについての法則のことであり，その結びつきを規定するものはなにかといえば，それは，まさしく生産における人間の社会的関係，簡単にいえば，生産手段を所有しているのは誰か，労働力の担い手である人間か，それともそれ以外の人間か，ということ，つまり，一言でいえば，生産手段の所有関係である。生産における人間の社会的関係，つまり生産関係の基本はまさしくこの所有関係であって，この生産関係そのものは，それぞれの歴史的社会においてみなちがっており，したがって，これら異なった生産関係に規定されてそれぞれ異なった「生産および交換」を支配する法則，つまり経済法則が貫徹することになるのである。

なお，ここで「交換」という言葉について付け加えておく必要がある，というのは，この言葉はすぐさま「生産物の交換」だと受けとられる恐れがあるからである。もしこれがそのまま「生産物の交換」を指したものとすれば，そのこと自体，生産者がその生産物を所有していてこれを必要な他人の生産物と交換しなければならないという関係の存在することを意味することになる。それでは，右の「生産および交換」にかんする法則は，私的所有にもとづく商品生産社会ただひとつにしか存在しないことになり，その他の歴史的社会は経済法則なしに存在するということにならざるをえない。右のような「生産物の交換」に限る考え方は，商品生産社会の俗物的表象にとらわれていることを示すものといえる。「交換」とは，「生産物」そのものの交換ではなく，むしろもっとも広い意味において，「労働」の交換をその内容とするものと考えるべきである。人間社会は，原始共産社会いらい，社会的必要労働の各成員への配分＝分担，つまり社会的分業の上に成り立ち，たえず社会的分業を発展させてきたが，この分業つま

り労働の分割は，いってみれば各成員がその個人的分担の労働を交換していることである。社会的所有のもとでは，この「労働の交換」は社会的・計画的分業の実行として直接に行なわれるが，私的所有のもとでは，私的労働はそのままでは「交換」されず，労働生産物＝商品の交換として遂行されなければならないのである。

以上によって，さきの定義についての眼目ともいうべきものが，人間社会を組み立てている基底ともいうべき生産関係そのものの上におかれていること，この生産関係によって規定されて貫徹せざるをえない人間自身の「生産および交換」を支配する法則――これこそが科学としての経済学の解明すべきものだということは，ほぼ明らかになったと思われるが，しかし，右の定義はいささか簡単にすぎてそこに出てくる言葉についても安易に受けとられる恐れもあるので，なお正確な理解に資するものとして若干の説明をつけ加えておこう。

まず，法則という言葉について，その意味内容を厳密に把握することが決定的に大切だということをよく銘記しておく必要がある。法則は，人間が頭の中で考えだしたものではまったくなく，古典学派経済学者や俗流経済学者たちがもてはやしているような原理とか原則とかいった類いのものとはおよそ無縁のものである。それは，ある与えられた生産関係にもとづく歴史的社会において，その生産関係そのものに規定されて必然的に，また強力的に，人間が意識するといなとにかかわりなく，つねに貫徹してやまないものであり，人間も社会もすべてその法則に従って，法則の命ずるとおりに実践しなければ，その社会も人間も存続することすらできないといったものである。人間が自由にするどころか，まさに自然諸力と同じように人間がそれに従わざるをえない，強力に貫徹する法則であるからこそ，たとえ社会的な法則であっても自然法則（das Naturgesetz）と名づけられるのである。この社会的自然法則をとらえて，人間が思いどおりにこれを制限したり利用したりすることができるなどと考えるのは，この自然法則の本質についての完全無欠な無知と誤解を示すものというのほかないものである。

さらに，注意する必要があるのは，右の定義のなかには「分配」という言葉が欠けていること，「分配を支配する法則」といった，俗流経済学者のふりまわす文句が出てこないということである。さきにこの拙論の「3」の(2)の「b)「経済学の体系」にたいして」のなかで，俗流経済学者（と自称「マルクス経済学者」）のかかげる「生産，分配，交換（流通），消費」といった「体系」の根本的誤謬を究明しおえているいま，右の定義のうちになぜ「分配」という文字が欠如しているかという理由は，もはや明白である。さらにたちいって言えば，この法則を規定する当の生産関係そのものが，すでに生産手段そのものの分配を示しており，またこの生産関係によって労働力と生産手段との社会的な結合の仕方，つまり生産の仕方も，さらにはその生産物が誰のものになるかという取得（Aneignung）も決定されるのであって，そこにこそ生産関係によって規定されて貫徹する法則の，法則たる所以が存するのである[16]。

(16)　さきに本論稿の「前篇」において，Political Economy にかんするO・E・Dの解釈を引用したのであるが，そこには，「the laws that regulate the production and distribution of wealth」と記

上記の定義はきわめて簡単なものであるが，しかし，これによって，同じく「経済学」という名称をいただきながら，古典学派および俗流の「経済学」とマルクス＝エンゲルスによって築きあげられた「経済学」とが本質的に異なったものであること，politcal economy の本来の論究対象は，政策や原理などではなく，客観的に貫徹する社会的自然法則であること，これによって経済学ははじめて科学の名に値するものとして築きあげられることになったということが，明確に示されているのである。そこには，経済学をはじめて科学（die Wissenschaft）にするための反科学的俗流経済学にたいするきびしい断罪の宣告が秘められていることを，私たちは真剣に考慮しなければならないのである。

(2)　歴史科学

経済学が究明すべき法則，経済法則は，現実に人間の外にあって貫徹するものであり，したがって，経済学がとりあげる社会が実在する人間社会，つまり「歴史的社会にほかならならないことは自明である。それゆえ，まず，経済学は，歴史的社会についての経済法則を究明すべき科学，つまり歴史科学にほかならないということができる。しかし，一口に歴史科学といってもその内容には種々性質を異にするものもあるので，経済学は，どういう意味において歴史科学なのであるか，いいかえれば，それが究明する法則はどのような特質をもっているかということを明確にする必要がある。とはいっても，その内容は簡単なものではなく，複雑な諸側面，諸関連をもっているので，その本質的な特徴ともいうべきものをとりあげて，簡潔に説明することにしたいと考える。

まず，対象である人間社会についてみれば，それは，有史いらい実在してきた社会，および現在生まれつつある人間社会について，それぞれ異なった歴史的社会が，どのような経済法則の貫徹によって歴史的に存在しえたかということを究明すること，これが第一の課題である。

人類が経験した歴史的社会は，原始共産社会にはじまり，奴隷制社会，封建制社会もしくは農奴制社会，資本主義社会という諸段階を経過して，現在は，資本主義社会から社会主義社会への移行の過程にあるいわゆる過渡期社会の相次ぐ誕生を見ている。これらの社会について，経済学は，その課題をはたすためにどのようなことをとりあげて究明するものであろうか？経済法則をとらえるということの内容は，どのようなものであるか？——この点について簡単に考えてみよう。

まず第一に究明されるべきもの，そしてつねに究明の基盤となっていなければならないのは，それぞれの歴史的社会がどのような生産関係にもとづいて成り立っているかということである。生産関係とは，いうまでもなく，生産における人間の社会的関係である。生産はつねに必らず生きた人間つまり人間労働力の担い手と死んだ生産手段との「結合」そのものであるから，生

されてある。この下線で示した言葉そのものがすでに，イギリスにおいて俗流経済学的潮流が支配的であることを物語っている。ここの「laws」も，「Gesetz」ではなく，俗流の「prineiples」と同様の意味をもつものとしておかれていることも，ほぼ疑いないところである。

産関係の内容は，第一には労働力の担い手である人間と生産手段との社会的関係，つまり，その労働者が生産手段を所有しているかどうかということ，簡単にいえば所有関係である。第二には，さきに述べた「結合」，つまり生産がいかにして行なわれるかという，生産の社会的な仕方そのものである。いうまでもなく，第一の所有関係が第二の生産の仕方を規定する。原始共産社会では原始的な共同的所有のもとで社会＝共同体そのものが各成員の生産手段との「結合」を決定するが，奴隷制社会では奴隷所有所が生産手段を所有して，労働力の担い手＝奴隷を，家畜同様に，生産手段に結びつけ，鞭のもとに生産を行なわせる。封建制社会では，封建的地主または領主が，土地を所有し，「半自由」の農奴を土地に緊縛して，経済外強制により，「結合」，つまり賦役労働をさせることで生産を行なわせる。資本主義社会では，生産手段を所有する資本家が，無所有の「自由な」賃銀労働者の労働力を買い入れて生産手段に結びつけて生産を行なわせる。これら三つの歴史的社会は，所有者は労働力の担い手の剰余労働を――直接に鞭によってか，経済外的強制によってか，または「飢える自由」によってか――強制的に使役し搾取する支配階級となっており，労働力の担い手はすべて被搾取＝被抑圧階級となっていて，階級対立関係が社会の脊椎（バック・ボーン）と成っているのである。（こうした階級関係を廃絶した共産主義社会をめざすものとして生みだされた過渡期社会については，後段でふれることにする。）

つづめていえば，人間社会は，「未開」の，階級のない共同体＝原始共産社会から始まって，それぞれ性質の異なった三つの階級社会を次々に経過して最後に階級のない共産主義社会にいたるまで，たえず発展＝変化をとげつつあるもの，つまり歴史的発展過程を――複雑な，ジグザグの道程を――たどって進みつつある運動主体であるということができるのである。それゆえ，これらのそれぞれ異なった生産関係のもとで貫徹する経済法則を究明するところに歴史科学としての経済学の意義が存するといわなければならないのである。

しかし，経済学が歴史科学としてもつ意義は，上に述べたように，歴史的社会の経済法則を究明するものであるということにつきるものでは，けっしてない。それぞれの歴史的社会の存立を支えている生産関係に規定されたそれぞれの経済法則を明らかにするということは，ひとつの生産関係を基盤とする歴史的社会が，なぜ，どのようにして，それと異なる生産関係を基盤とする他の歴史的社会に移行し変革されたのかということ，どのようにして新もい生産関係が生まれ，新たな経済法則が貫徹されるようになったかということの解明と必ず結びついているものであり，また後者の解明なしには前者の究明も不精確な死んだものとならざるをえない。一つの歴史的社会の存立を支えている社会的必要物資の「生産および交換」を支配する経済法則の貫徹そのものがその社会の没落，つぎの社会への移行＝発展を必然的に生みだすとすれば，その経済法則の究明は，その歴史的社会の生成・発展・消滅＝交替の必然性＝法則をも明らかにするものでなければならないことになる。つまり，経済学が担うべき重要な課題として，ここにそれぞれの歴史的社会についてその歴史的存在の根拠を，いいかえれば，その社会の生成

・発展・消滅＝交替の法則の貫徹を解明するということが出てくるのであって，経済学が歴史科学であるということの意味のなかには，実にこうした歴史的社会の歴史的運動法則を解明するものということが，大きな比重をもってふくまれているのである。

以上述べた点についてきわめて適切な示唆を与えてくれるのは，マルクスがその労作『経済学批判』の「序言」のなかでかかげているいわゆる「唯物史観の定式」である。拙論の後段においても関説する必要があるので，いささか長きにすぎるうらみもあるが，これをつぎに引用しておこう（……は省略部分）。

「人間は，彼らの生活の社会的生産において，一定の必然的な，彼らの意志から独立した生産諸関係に，すなわち，彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は，社会の経済的構造を構成する。これが実在的土台であり，その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえたち，そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。……社会の物質的生産諸力は，その発展のある段階で，それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と，あるいはそれの法律的表現にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は，生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに，巨大な上部構造全体が，あるいは徐々に，あるいは急激にくつがえる。このような諸変革の考察にあたっては，経済的生産諸条件における物質的な，自然科学的に正確に確認できる変革と，それで人間がこの衝突を意識するようになり，これとたたかって結着をつけるところの法律的な，政治的な，宗教的な，芸術的または哲学的な諸形態，簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区別しなければならない。……一つの社会構成は，それが生産諸力にとって十分の余地をもち，この生産諸力がすべて発展しきるまでは，けっして没落するものではなく，新しい，さらに高度の生産諸関係は，その物質的な存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは，けっして古いものにとって代わることはない。それだから，人間はつねに，自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば，もっと詳しく考察してみると，課題そのものは，その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか，またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが，つねに見られるであろうからである。大づかみにいって，アジア的，古代的，封建的および近代的ブルジョア的生産様式を経済的社会構成のあいつぐ諸時期としてあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は，社会的な生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは，個人的敵対という意味ではなく，諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は，同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成でもって人間社会の**前史**は終わる」(ibid.Bd.13.S.8-9. 訳6-7ページ，ゴシック体―山本)。

この「唯物史観の定式」の中にはきわめて重要な意義をもつ命題が少なからずふくまれているのであるが，当面の主題に深い関係をもつと思われるものを念頭においてみたとき，歴史科

学としての経済学が当然明確にすべき課題としてはおよそつぎのようなことが挙げられるであろう。

イ．まず論者がとりあげている社会が，さきの五つ（過渡期社会をふくめて）のうちのどの歴史的社会であるかを明確に示すこと。

ロ．問題となっている社会の基本的な生産関係を，いいかえれば所有関係を明示し，この生産関係と結びつきこれを規定するところの生産諸力のあり方を明確に示すこと。

ハ．右の生産関係によって規定されると同時に他面その生産関係の存続＝再生産を支えているところの，社会的必要物資についての「生産および交換」の諸法則を解明すること。ここに，経済学に固有の，本来の課題の中心がおかれている。

ニ　右の「生産および交換」の諸法則の貫徹によって生産＝再生産が行なわれることにより，生産諸力がいかに必然的に発展するかという，生産諸力の発展過程を追究すること[17]。

ホ　生産諸力の必然的発展に伴って，生産諸力と生産諸関係との対応が崩れ，両者の間に矛盾・軋轢が生まれてしだいに激化してゆくが，それがその歴史的社会でどのような形で，どのように進行していくのか，または進行していったかということをあとづけ，両者の矛盾の成熟・衝突によってその生産関係がより高度の，生産力に対応した新しい生産関係にどのようにして変革されるか，または変革されたかということ，いいかえれば，旧社会がいかにしてより高い，つぎの社会に変革されるか，または変革されざるをえなかったかということを解明すること。ただし，この社会の変革＝移行の問題は，簡単でなく複雑な側面を多々もっているので，これについては後段で改めてふれることにし，また，過渡期社会の問題についても，同じく後段での論究にゆずることにしたいと考える。

(3)　理論体系

経済学が科学の名に値するものとなるためのもっとも決定的な要件，いいかえれば科学的経済学の骨組の中枢を成しているもの――それは，実に，それが精確な理論体系で組み立てられているというところにある。この「理論体系」(das theoretische System) という言葉は，安易に用いられがちであるが，そのために「科学」という言葉の内容も歪められることになるのである。経済学の分野では「理論体系」という言葉そのものを問題にしない向きが少なくないのは，それが俗流経済学にとっては無縁のものであり，お役に立つものではないからである。「理論体系のないところに，科学はない」という真理は，もちろん俗流＝御用学者にとっては

17）歴史の経過するにつれて，おそかれはやかれ，またその進展に遅速のちがいこそあれ，人間の労働生産力は必然的に発展するものであるが，この生産力発展法則を認識する能力のない，「原理論」かぶれの「マルクス経済学者」も，この国には，いらっしゃるようである。猿やその他のすべての動物と人間との根本的差異がまったくわからないこのような先生，動物にはありえない貴重な脳をお持ちでない方には，エンゲルスの筆に成る名作『猿の人間への進化における労働の役割』(,,Anteil der Arbeit der Menschwerdung des Affen“)の中の金文字がまったくわからないというのも，まこと，無理からぬところである。

三文の値うちもない。つぎにその概念について，もっとも肝要と思われる要点をあげて簡潔な説明を加えることにしよう。

まず明確にしておく必要があるのは，「理論」(die Theorie) という言葉である。端的にいえば，それは，客観的に——人間の意思・意識のいかんにかかわらず——存在し貫徹している法則＝自然法則をとらえ，その本質を解明するとともにその必然的な現象諸形態——諸作用，その諸結果——を追究して，これらを首尾一貫的に総括したものである。客観的な自然法則ではなく，人間が頭の中でつくりあげた観念的な構成物は，たとえどんなに美事に組み立てられていても，理論の名に値するものではないのであって，俗流経済学がもっぱら執着しているのは，その本性上，すべてこうした観念的創作「理論」なのである。

しかし，科学的な理論にとっては，なお，そこに決定的な要件が控えていることを見落してはならない。それは，法則そのものは，誰にでもとらえられるような，そのままの形で現われるものではないということ，人間がその感覚をもって直接とらえることのできる現象諸形態というものは，そこに貫徹している法則とはまったく違った，むしろその法則そのものを隠蔽しこれとちがった形をあらわすものであって，その現象形態によって観察者はその奥にある本質としての法則を把握することが困難である，ということである。「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するものならばおよそ科学は不要である」という命題は，マルクスが再三説いているところであるが，そのなかの「本質」はそのまま「法則」におきかえることができる。表面の現象形態を分析してその奥にかくされた本質＝法則をとらえ，さらにその本質＝法則がなぜそのような現象形態を必然的にとるかということを説明しえたとき，そこに真に理論の名に値するものがつくりあげられるのである。マルクスは主著『資本論』第一巻の冒頭を飾る「第一版序文」のはじめの部分において，

「経済的諸形態の分析では，顕微鏡も化学試薬も役にはたたない。抽象力が両方の代わりをしなければならない」(ibid.Bd.23. S. 12. 訳 8 ページ)

と懇切丁寧に教示してくれているのであるが，この「抽象力」(die AbstraKtionsKraft) とは，いうまでもなく厳密・正確な論理的思考力を指して言ったものである。厳密・正確な論理的思考によってこそ，人目を眩惑する現象形態を正しく分析してその奥にかくされた本質＝法則を誤りなく把握することが可能となるのである[18]。

---

18) このような論理的思考による「顕微鏡的穿さく」については，マルクスは商品形態の分析におけるその決定的意義をつぎのように説明している。

「教養のないものには，この形態の分析は，ただあれこれと細事の穿さくをやっているだけのように見える。じっさい，そこでは細事の穿さくを事とするにはちがいない。しかし，それはちょうど，顕微解剖でそのような穿さくがなされるのと同じなのである」(ibid.Bd.23. S. 12. 訳 8 ページ)。

このような顕微鏡的穿さくの不得手な自称「マルクス経済学者」のなかには，「価値法則とは，価値と価格とが一致することである」という主張を堅持しているものも少なくない。その先生方は「交換価値＝価格は，本質である価値の現象形態にほかならない」というマルクスの明瞭な教示も，資本主義社

つぎに重要なのは，「体系」ということである。それは，一般的な意味での「体系」ではなく，経済学が科学としてあるためには，それが厳密な「理論体系」でなければならないということを指していったものである。個々の法則を解明した理論は，個々の「学識」(das Wissen) にすぎず，科学 (die Wissenschaft) ではありえない。一つの専門領域におけるあらゆる現象について厳密な分析が行なわれて，それらの現象の奥にある諸法則が解明され，それら諸法則の関連が明らかにされて，もっとも基礎的でもっとも簡単な法則を解明したもっとも抽象的・基本的な理論を端初として，これに論理必然的に正しく規定を加えることによって，しだいにより複雑でより具体的な理論へと上向してゆき，最後にもっとも複雑でもっとも具体的な理論にまで到達するという，理論の発展系列がつくりあげられたとき，そこに科学の名に値する理論体系が築きあげられているといえるのである。このように，もっとも抽象的でもっとも簡単な基本的法則または範疇を端初として，自己発展により論理必然的により複雑でより具体的なものへ上向してゆく体系こそが学問 (die Wissenschaft) であることを論理的に解明したのがドイツのすぐれた哲学者ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) そのひとであることは，周知のところであり，また彼がはじめて確立した弁証法の観念論的殻をうちやぶって，真に科学的な唯物弁証法をうちたてたのがほかならぬマルクスそのひとであることも，多言を要しないところである。

ところで，経済学は，たんに一個の「理論体系」として科学であるというだけでは，その本質的特徴をとらえたことにはならない。それは，さきにもみたように，一個の歴史科学であり，その取り扱う理論は歴史的社会の経済法則である。したがって，その理論体系もたんなる論理的展開とは本質的に異なるものとならざるをえないのである。そこで，つぎに経済学はどのような本質的特徴をもつ理論体系であるかを簡単に，箇条書きで示してみよう。

第一点。さきに(2)において，経済学が究明するのは実在する歴史的社会の経済法則であって，歴史的社会として五つのものがあげられたのであるが，これによってみれば，それぞれの歴史的社会についてそれぞれ異なった科学としての経済学が成り立たなければならないようにおもわれる。しかし，科学の名に値する理論体系としての経済学がつくりあげられるのは，そしてまたつくりあげられなければならないのは，ひとり資本主義社会についてだけなのである。その他の諸社会の経済法則は，資本主義社会のそれにくらべて，はるかに簡単であって，それらはすべて，資本主義社会について明らかにされた経済法則についての理論を正しく適用することによって，十分にとらえられるものなのである。

では，なぜ，資本主義社会についてのみ経済学が必然であるのかといえば，そこでは生産諸関係は複雑であるばかりでなく，その生産関係そのものも，その生産関係によって規定されて貫徹する経済法則も，そのまま目でとらえられる形で現われることがまったくなく，すべて諸

会では，いまだかつて，価値と価格が一致するという事態が生じたためしはないという事実も，完全に知らないことを宣伝していられるのである。

物の独特の社会的性質および社会的関係という形をとっており，またそういう物的形態そのものが当の人間を支配するものとなっているからである。

資本主義社会以外の歴史的諸社会では，生産関係はきわめて簡単で，目をもって誤りなくとらえられ，人間はつねに主体として経済法則をいわばそのまま体現するものとなっている。原始共産社会では，人間は共同体の成員として生産を行ない，「生産および交換」は共同的に目で見られるとおりに遂行される。奴隷制社会では，奴隷所有者がその所有する奴隷を生産手段に結びつけ，鞭のもとに，家畜同様に労働させ，その生産物全部を取得し，その一部分を奴隷に「餌」として与えるという法則は，そのままの形で現われている。封建制社会においても，封建地主による農奴の賦役強制も，あるいは封建的地代のまきあげも，そのままの形で実現されている。これらのところでは，生産関係も経済法則も，人間の間の関係および生産における労働者の状態にそのままあらわれており，すべて事理明白で，そこには分析を要する複雑な問題はなんら存しないのである。マルクスがくりかえし強調している「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するのならば科学はおよそ不要であろう」という命題を想起するならば，これらの歴史的諸社会については科学としての経済学は成り立ちえないこと，むしろもっとも発達した複雑・高度な資本主義社会について明らかにされた経済法則にかんする理論を正しく適用することによって，それらの諸社会の経済法則は容易に把握されるところとなっていることが理解されるはずである。さきに本論稿の「3」の(1)にかかげられたエンゲルスの「国民経済学は，商業が拡大した自然の結果として生まれた。」（本誌第42巻第4号，61ページ参照）という言葉は，――国民経済学とは言っているものの――科学としての経済学が必然的に生まれる根拠を示唆しているものとして，なかなか意味深いものがあるのである。その必然性の根拠として，私は，さきに人間の間の生産関係もそれによって規定される経済諸法則もすべて人間の外部にあって人間に対する物の形態をとって現われ，かえってこれらの物的形態によって人間が完全に支配これているということをあげたのであるが，これについてはなお若干の補足説明が必要である。

第二点。資本主義社会の一般的な基盤となっている生産関係は，自然発生的な社会的分業と結びついた生産手段の私的所有であるが，この生産関係のもとでは，まず第一に労働生産物が商品という特別の社会的性質をもった物として，人間自身を支配することになる。商品とは，私的所有のもとでの基本的な経済法則を示すもので，その特別の社会的性質を指して経済的な形態といい，これが資本主義社会の経済諸法則を示すさまざまな経済的諸形態規定，いいかえれば経済学的諸範疇のうちでもっとも基礎的でもっとも簡単なもの，基本的なものである。単純な私的所有の関係は必然的に発展をとげて生産関係そのものが拡大されより複雑なものになるにしたがって「生産および交換」の関係もそれを規定する経済法則も発展をとげ，それらの発展した生産関係および経済法則は，より発展した，より複雑な経済的諸形態規定，いいかえればより複雑な経済学的諸範疇を生みだす。それが，貨幣であり，資本であり，利潤，利子，

地代といったものである。経済学が究明すべき経済法則は，すべてこれらの経済的形態規定または経済学的範疇の形であらわれ把握されるのであるが，問題は，これらの範疇について，これらをどのような順序で論究することによって科学としての経済学の理論体系をつくりあげるべきか，ということである。

この問題にたいする解答は，すでにさきの説明で与えられているかにみえる。つまり，もっとも簡単でもっとも基礎的・抽象的な範疇を端初として，しだいに規定を加えてより複雑でより具体的な範疇に上向してゆき，最後にもっとも複雑でもっとも具体的な範疇に到達する体系がそれである，と。だが，経済学がとりあつかう範疇は，たんなる論理的範疇ではなく，現実に存在する経済的関係の物的表現にほかならず，これらの経済的諸関係はいずれも歴史的に，歴史的社会的諸関係のなかで生まれ，それらの歴史的関係によって規定され，またそれらの関係を反映しているものにほかならないのである。そこには，歴史的発展関係と論理的発展関係とをいかに結びつけて経済学的諸範疇の展開をはかるべきかという，複雑な問題があるのである。この問題については，マルクスはつとにさきにあげた遺稿『「経済学批判」への序説』のうちの「3　経済学の方法」のなかでたちいった論究をこころみているのであるが，そこで導き出されている結論的叙述からすこしく抜粋してかかげてみよう（……は省略部分）。

「およそどの歴史的，社会的科学の場合にもそうであるように，経済学的諸範疇の歩みの場合にもつねに次のことが銘記されなければならない。すなわち，現実界でもそうであるように頭のなかでも主体が，ここでは近代ブルジョア社会が，与えられているということ，したがって，諸範疇は，この特定の社会の，この主体の諸定在形態，諸存在規定を，しばしばただその個々の面だけを，表現しているということ，したがってまた，近代ブルジョア社会は，科学的にも，それがこのようなものとして問題になるときにはじめて始まるのではけっしてないということである。このことが銘記されなければならないのは，それが同時に区分についての決定的な手引きを提供してくれるからである。たとえば，土地所有から始めること以上に自然的なことはないように思われる。なぜならば，土地所有は，土地すなわちすべての生産と存在との源泉に結びついており，またある程度固定したすべての社会の最初の生産形態――農業――に結びついているからである。しかし，これ以上の間違いはないであろう。ある一定の生産が他のすべての生産に，したがってまたこの一定の生産の諸関係が他のすべての諸関係に，順位と影響力を指示するということは，どの社会形態にもあてはまることである。それは，一つの一般的な照明であって，他のすべての色彩はそのなかにひたされて，それぞれの特殊性におうじて修正されるのである。それは一つの特別なエーテルであって，そのうちに出現するすべての存在の比重を決定するのである。たとえば牧畜民族の場合。……彼らの場合，ある種の農耕形態，散在的な農耕形態が現われている。土地所有はこの形態によって規定されている。それは共同体的土地所有であって，これらの民族がなお彼らの伝統に固着している程度におうじて，あるいはより多く，あるいはより少なくこの形態を保持する。たとえばスラヴ人の共同

体所有。定着的農耕をおこなう諸民族にあっては，……すなわち古代諸民族や封建的諸民族でのように定着的農耕が優勢な諸民族では，工業やその組織でさえ，またそれに対応する所有の諸形態でさえ，多かれ少なかれ土地所有的な性格をおびている。すなわち，古代ローマ人のようにまったく定着的農耕に依存しているか，または中世に見るように，都市やその諸関係でも農村の組織を模倣しているのである。中世には資本そのものが――それが純粋な貨幣資本でないかぎり――，伝統的な手工業道具などとして，このような土地所有的性格をおびている。ブルジョア社会ではそれが逆である。農業はしだいにたんなる一産業部門となってきて，まったく資本によって支配されている。地代も同じである。土地所有が支配している形態ではどの形態でもまだ自然的関係が優勢である。資本が支配している形態では，社会的につくりだされた要素が優勢である。地代は資本なしには理解できない。ところが，資本のほうは地代なしでも理解できる。**資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である。資本が出発点にも終点にもならなければならない。**そして，土地所有よりもさきに展開されなければならない。……

それだから，経済学的諸範疇を，それらが歴史的に規定的範疇だった順序にしたがって配列することは，実行もできないし，まちがいでもあろう。むしろ，諸範疇の順序は，それらが近代ブルジョア社会で互いにもっている関係によって規定されているのであって，この関係は，諸範疇の自然的順序として現われるものや歴史的発展の順序に対応するものとは，まさに逆である。ここで問題にされるものは，経済的諸関係がいろいろな社会形態の継起のなかで歴史的に占める関係ではない。……**問題なのは，近代ブルジョア社会のなかでのこれら諸関係の編制なのである**」(ibid. Bd. 13. S. 631-638. 訳633-635ページ，傍点――マルクス，ゴシック体――山本)。

「資本が出発点にも終点にもならなければならない」ということは，理論体系の叙述の最初と最後が「資本」によって占められるということではけっしてない。資本主義社会は現実に与えられたものとして目の前におかれていて，そこで貫徹する経済諸法則は，すべて「資本」を基本とも中心ともして把握されなければならないこと，「資本」にかんするもっとも基礎的・本質的な，その意味でもっとも簡単で抽象的な経済学的範疇を端初に据え，「資本」そのものの発展によって規定されるより具体的な諸範疇の究明がこれにつづき，最後に「資本」によって規定されたもっとも複雑でもっとも具体的な経済的諸形態規定つまり諸範疇の解明がおかれるという順序の体系，――簡単にいえば「資本」を中心として「資本」そのものの本質的規定を示すもっとも抽象的でもっとも基本的な範疇からはじめて資本によって規定されるもっとも複雑でもっとも具体的な諸範疇に終わる体系が，科学的な経済学としての理論体系のあり方であるといえる。

ところで，「資本」そのものの本質的規定は「その運動を通じて価値増殖または自己増殖をとげる価値主体または貨幣」ということであって，「資本」という範疇の解明には「貨幣」の

究明が先行しなければならず，「貨幣」はまた「貨幣商品」または「一般的等価物」としての「商品」にほかならず，したがって「資本」範疇の究明の前に，まず「商品」の，ついで「貨幣」の範疇の解明がおかれなければならないことになる。「商品」は，さきにも述べたように，資本主義社会の基底的生産関係＝資本主義的私的所有の一般的基礎としての私的所有または本来的（eigentlich）私的所有の生産関係のもとでのもっとも基礎的な経済法則をあらわす経済的形態規定であり，商品生産および交換の必然的発展は「貨幣」を必然的に生みだす。商品から貨幣への範疇の論理的発展は，商品生産の歴史的発展にそのまま対応している。しかし「貨幣」から「価値増殖する貨幣」つまり「資本」への範疇の移り行き＝展開は，「貨幣」の自己発展，つまり貨幣流通の発展そのものによっては行なわれえない。ここでは，範疇の論理的展開は，歴史的発展と対応するものとはなっていない。それは，「商品」および「貨幣」は，私的所有一般または本来的私的所有という生産関係を基盤とし，それによって規定されるものであるが，資本は，本来的私的所有の分解によって生まれる資本主義的私的所有の基盤の上にのみ，これによって規定されるものとしてはじめて存立するものであるからである。本来的私的所有の資本主義的私的所有への転化には，直接的生産者からの生産手段の強力的収奪と無所有となった労働力の担い手を賃銀労働者に強力的に陶冶するという，いわゆる本源的蓄積の歴史的過程が介在しなければならないのであって，この過程はまた，科学的経済学がそれとして究明すべき特別の課題を成すのである。

以上曲りなりにも解説を加えてきた理論体系を実際に示しているのがマルクスの主著『資本論』(,,Das Kapital‘‘) にほかならないことはいうまでもないところであって，それがなぜ「資本」という表題をいただいているかということも，さきの「序説」の言葉そのものによって容易に理解されるところである。『資本論』ではまず第一巻のはじめにおいてもっとも簡単な範疇である「商品」が，ついで「貨幣」が，いわば「資本」への必要な「まえおき」として論究され，それから主題としての「資本」の究明にはいり，まず「価値増殖」の核心を暴露して価値増殖分つまり剰余価値の法則を明らかにし，剰余価値増大の方法の発展を追究して，「絶対的剰余価値の生産」，ついで，「相対的剰余価値の生産」について精確な究明を展開している。「相対的剰余価値の生産＝増大」の方法として，歴史的発展の順序にしたがって，協業，マニュファクチュア，機械制大工業があげられ，それらがいかに労働の生産力を増大させ剰余価値を増大させるか，そこでの賃銀労働者の労働および労働力の担い手としての状態がどのようになるかということがあますところなく究明されている。第二巻では，「資本」の運動過程の他の一面，流通過程についての諸法則，諸形態規定が究明され，最後の第三巻ではじめて「資本」の運動過程総体から出てくるもっとも具体的な諸形態規定＝諸範疇として，「利潤，利子，企業者利得，地代」の各範疇がとりあげられ，それぞれ精確な究明が与えられているのである。

『資本論』の中での理論の展開については，なお重要な意味をもつ側面がすくなくないのであるが，ここではそれらについて立ち入ることはひかえ，科学的な経済学についてその理論体

系の意義を明確に把握することがいかに決定的に必要であるかということをおわかりいただくために，ひとつの実例をあげて説明することにしよう。

マルクスの主著『資本論』の中に出てくる基本的な諸範疇について，直接目にふれた個所だけにとらわれて，その理論体系全体を通じてその範疇の豊富，複雑な諸規定の展開を注意深く跡づけて把握するという努力を払わない安直な読み方によっては，現実の経済学的範疇については，まったくみじめな一面的解釈しか得られないということを端的に示しているのは，大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』(1979年，岩波書店）の中の「貨幣」という項目についての解説である。つぎにその全文を――当面重要でない部分は省略して，……で示して――かかげてみよう。

「**貨幣**　I　性質　x量の商品A＝y量の貨幣商品，という商品の価値を貨幣で表現した形態は，x量の商品A＝y量の商品B，という一商品の価値を他のただ一つの種類の商品で表現した形態（価値形態のもっとも簡単な姿）の発展した姿である。商品の価値の大きさはその商品を生産するのに社会的に必要な労働時間によって決定されるが，商品のなかにふくまれているこれらの労働時間は他の商品との交換を通じてのみみずからを表現しうるのであって，直接に何時間と測ることはできない。そこで商品は他の商品でその価値を表現するのであるが，他のあらゆる商品がもっぱらある一つの商品でその価値を表現するようになり，こうした一般的等価物たることが一つの種類の商品の社会的機能となると，この商品は貨塔商品として他のすべての商品から区別されるものとなる。つまり貨幣として機能するものとなる。……

このように諸商品の貨幣商品たとえば金での価値表現は，諸商品の価値表現の発展の必然的結果たるものであるが，それとともに，こうした貨幣商品の成立は商品の交換過称の必然的結果でもある。……

……

II　機能　(1)価値尺度……

(2)流通手段……

(3)その他の機能　価値尺度機能と流通手段機能とは貨幣を貨幣たらしめる二つの基本的な機能であり，貨幣はこの両者が統一されたものである。そしてこのような統一としての貨幣は流通手段としての特殊な規定性における貨幣とは区別された，交換価値の独立的な定在であり，このようなものとして価値尺度機能や流通手段機能とは異なる機能を展開する。

まず商品流通の中断，すなわちW―GからG―Wへの移行が中断されることによって，Gは蓄蔵貨幣の形態をとることになる。またWとGとが現身をもって相対する直接的形態W―Gが時間的に分離することによって，Gは支払手段という形態をとることになる。そしてさらに，商品流通が一国の範囲から出て国際的商品流通に発展するにともなって，世界貨幣という形態をとることになる。

……」(前出，137―139ページ)。

一見してただちにわかるように，これは『資本論』第一巻第一篇第一章から第三章までの内容を――肝心のところは飛ばして――間違いだらけの解釈のもとにただ引き写して並べただけのものである。つぎに，そのうちの目に余る誤謬と欠陥とを簡単に挙げてみよう。

まず第一に，冒頭の「「性質」というのは完全な出鱈目の当て字である。そこに出てくるの

は第三節「価値形態」からの間違いだらけの引き写しである。決定的な欠陥は，貨幣が私的所有という生産関係のもとで，その生産関係によって規定され，必然的に生まれた経済的な形態規定であるということ，このもっとも肝心な基本が脱け落ち，忘れられてしまっていることである。その形態規定こそがまさしく，「性質」なのである。

右のような基本点――私的所有という生産関係――の無視または忘却は，価値形態の説明にもよく示されている。価値形態をとらえて「商品のなかに含まれている，その商品の生産に社会的に必要な労働時間を表現する」ものとしているのは完全な誤りである。「労働時間」は二の次で，第一に決定的なことは，商品生産に支出された私的労働を社会的労働におきかえること，言いかえれば，まず商品が価値という質をもっていることを表現することである。労働時間という量の表現はその上のことである。これによって，執筆者の頭脳の中には，正確な価値概念が全く欠如していることが裏書されている。「商品流通の中断」で支払手段を説明しているのは，商品流通(die Warenzirkulation)という概念についての無知をあらわすものでしかないが，それにもまして注目されるのは，第一章からの引き写しにもかかわらず，その第4節の内容が全部欠落しているということである。

第4節は「商品の物神的性格」をみごとに解明しているものであるが，それはまた同時に「貨幣の物神的性格」をも解明しているものであり，この「物神的」貨幣こそ，今日の貨幣の現実の姿であることは，物を正しく見る眼をもっている者ならば誰でもよく知っているところである。マルクスは，右の第三章第三節の「a　貨幣蓄蔵」の中に特に注(91)を設けて，かのシェイクスピアの作品『アゼンスのタイモン』の中の有名な次のせりふをかかげているのであるが，執筆者は，このせりふがその眼に入らないのか，それともこのせりふは今日の発達した「民主主義的」資本主義社会には全く妥当しない絵空事だと考えているのであろうか？

「黄金？　黄色い，ギラギラする，貴重な黄金じゃないか？　こいつがこれっくらいありや，黒いものも白に，醜も美に，邪も正に，賤も貴に，老も若に，怯も勇に変えることができる。……神たち！なんとどうです？　これがこれっくらいありや，神官どもだろうが，おそば仕えの御家来だろうが，みんなよそへ引っぱってゆかれてしまいますぞ。まだ大丈夫という病人の頭の下から枕を引っこぬてゆきますぞ。この黄色い奴めは，信仰を編みあげもすりや，ひきちぎりもする。いまわしい奴をありがたい男にもする。白癩病みをも拝ませる。盗賊にも地位や爵や膝や名誉を元老なみに与える。古後家を再縁させるのもこいつだ。……やい，うぬ，罰あたりの土くれめ，……淫売め」(ibid. Bd. 23. S. 136，訳173ページ)。

もっとも寒心にたえない決定的な欠陥は，その執筆者が科学的な理論体系について完全に無知であること，総じて『資本論』の中の個々の文章は目に映ってもその全体の仕組みは目にも入らず，また目に入れようともしていないことにある。『資本論』では，貨幣は，私的所有一般という生産関係のもとで，そのもっとも簡単でもっとも基本的な形態において分析されているが，しかし，生産関係が資本主義的私的所有に変化＝発展することにより，貨幣はより複雑

でより具体的な形態規定をあらわすもの，つまり剰余価値を生む資本となり，さらに展開してもっとも複雑でもっとも具体的な形態規定，すなわち利子という「金の卵」を生む貨幣として特別の商品，利子生み資本の形態をもつことになる。資本になり，利潤を生み，また利子を生む貨幣――これが現実にある貨幣であり，これは『資本論』の理論体系によって誰にもわかるようにつぶさに論証されているところ，そしてまたこの資本主義社会に住む人々すべての常識ともなっている事実でもある。辞典に要求されている「貨幣」の説明内容は，当然，この社会での生きた姿の貨幣でなければならないのに，なんと，その「貨幣」の解説は，数千年も前からおよそ貨幣のあるところではどこにも見られる「性質」をもってきて現代の貨幣を説明しているのである。理論体系のなんたるかはわけわからず，はじめに目につくもっとも簡単な規定の貨幣についての叙述で事をすまし，体系の全体を通じて明確にされる資本主義社会の現実の貨幣についても，貨幣による人間支配についても，まったくふれるところのない「理論的解説」！「貨幣理論」の「専門家」で名だたる「マルクス経済学者」によるこのような「牧歌的」解説に思いがけず恵まれては，日ごろその「貨幣」をあやつってあくどい荒稼ぎでしこたまふところを肥やしている金融資本家やサラ金業者どもは，ありがたい「免罪符」にありついて，さぞかしわが意を得たりとほくそ笑むことであろう。

(4)　発展法則

科学的な経済学の理論体系においても，もっとも簡単な範疇である商品・価値からはじまってもっとも複雑な範疇である利潤，利子，地代にいたるまで，そこに出てくる範疇はすべて物的な形態規定であって，一見，古典学派経済学や最新の俗流経済学をもふくめて一般に経済学というものは，そのような物を研究対象とするもののように思われる。しかし，科学的経済学とその他のいわゆるブルジョア経済学との根本的差異は，科学的経済学にあっては経済学的諸範疇は，生産における人間の諸関係の物的反映にすぎず，それら物的形態規定による人間の諸関係の支配をあらわすものだというところにあるのであって，これについてはこれまでにも説明するところがあった。しかし，経済学的諸範疇が人間の諸関係の物的表現にすぎず，それらの諸範疇そのものが人間および人間のあいだの諸関係を規定し支配するということを解明した点にだけ，科学的経済学の本質的特徴があるのではない。いまひとつ，決定的に重要なことは，それが経済学的諸範疇の分析を通じて，諸範疇そのものに規定されて人間および人間のあいだの諸関係が発展＝変化するという法則をつぶさに解明した唯一の経済学である，ということである。

資本主義社会は，生産手段の私的所有者＝資本家の階級と無所有の賃銀労働者の階級という二大階級の対立の上に築かれており，ここでは，さきにあげたマルクスの言葉――「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である。資本が出発点にも終点にもならなければならない」――が明示しているように，社会を支える生産も生産力の発展もすべて資本によって行なわれ，推進される。資本が唯一最大の目的ともそれ自身の推進動機ともしているのは，最

大限の価値増殖＝剰余価値増大であるが，このためには生死をかけた競争戦に勝ちぬかねばならず，そのために生産方法をたえず改善するとともに大規模にせねばならず，したがって資本蓄積をおし進めなければならない。このような，資本による不断の改善，より進んだ生産方法の採用とその一般化の法則がどのような形で必然的につらぬかれているかということは，主著『資本論』第一巻第四篇「相対的剰余価値の生産」のなかで詳細に論究されている。そこでは，資本主義的生産方法が単純協業からマニュファクチュアへ，さらに機械制大工業へと発展していった経緯と，機械制大工業が無限に生産力を増大させる可能性をもつと同時に賃銀労働者からの可能なかぎり大きな剰余価値の搾取を保証する，資本にとって「最善の」生産方法であることが解明されているばかりでなく，この資本主義的生産方法の推進・高度化によって人間労働力の担い手である賃銀労働者の階級がどのようになってゆくかという発展法則も，さらには，そうした資本による生産力のめざましい発展が，市場＝消費に顧慮することなくますます増大する大量の生産物をつくりだすのにたいして資本主義的私的所有による生産物そのものの資本的私的取得という狭い枠がこれに敵対するものとなり，こうして，ますます発展する生産力と資本主義的生産関係の狭い枠との間の矛盾・軋轢はいよいよ増大して，ついに周期的過剰生産恐慌という形で爆発し，一時的・強力的に解決されなければならなくなるということ――これらの発展法則が精確に解明されているのである。

しかし，このような資本による変化＝発展の法則のなかで，もっとも重要な意義をもつものは，さきにかかげた「唯物史観の定式」の中に明示されている，より進んだ生産力と旧来の生産関係との矛盾・衝突が旧来の生産関係の根本的変革，新しいより高い生産関係への移行＝発展を必然的にするという，社会そのものの変革＝発展の法則である。そのより進んだ高度の生産力のあり方，その態様については，さきに述べた第一巻第四篇の内容がこれをつまびらかにしている。肝心の問題は，人間であり，人間労働力を担ってその高度の生産力を支える能力をりっぱに具えているばかりでなく，資本主義のもとでよぎなくその身につけた個人主義・利己主義的観念と思想とを断ちきることができて万人＝社会のために奮闘することを惜しまず，しかも資本家階級の強力的な弾圧・干渉を排除してその抵抗を粉砕する力のある組織を築きあげることのできる人間集団であり，正しくは階級である。『資本論』は，一方において資本による高い生産力の創出・普及を明らかにするとともに，その反面，右の変革＝発展を推進する階級――資本がつくり出し鍛えあげた大工業プロレタリアート――を資本そのものがつくりあげるという法則を精確に究明しているのである。こうした発展法則について，もっとも的確かつ簡潔に説明している叙述部分を第一巻第24章の結びとしておかれた第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の中から引用してかかげ，この「(4)　発展法則」の結びに代えることにしよう。

「この収奪〔大資本による小資本の収奪〕は，資本主義的生産そのものの内在的諸法則の作用によって，諸資本の集中によって，行なわれる。いつでも一人の資本家が多くの資本家を倒す。この集中，すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて，ますます大きくな

る規模での労働過程の協業的形態，科学の意識的な技術的応用，土地の計画的利用，共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化，結合的社会的労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約，世界市場の網のなかへの世界各国民の組み入れが発展し，したがってまた資本主義体制の国際的性格が発展する。この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数が絶えず減ってゆくのにつれて，貧困，抑圧，隷属，堕落，搾取はますます増大してゆくが，しかしまた，絶えず膨脹しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大してゆく。資本独占は，それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働力の社会化も，それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私的所有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される」(ibid. Bd. 23. S. 790—791. 訳994—995ページ)。

5　貨幣物神の支配と奴隷化

私的所有にもとづく社会では，労働生産物は必然的に商品という形態をとり，商品生産の発展はまた貨幣商品を生み出すという法則，そしてその貨幣が人間から独立し人間を支配するという自然法則を解明したマルクスは，「貨幣物神」(der Geldfetisch) という言葉でこの「全能の貨幣」を正しく特徴づけている。こうしたいわば「魔力」をそなえた貨幣の人間支配，すべての人間が貨幣にひきずりまわされるみじめな奴隷となっているという法則は，さきの引用にも示されているように，すでにシェイクスピア (William Schakespeare) の生きていた世紀においても人間社会を支配していたものである。しかし，資本主義的生産の高度に発展した最近の帝国主義諸国においては，貨幣の人間支配，人間の貨幣への奴隷化は，量的にのみならず，質的にも一段と拡大され深まったものになっているのである。働くために食うのではなく，食うために働くという，動物以下的な生き方や，金を儲けるためには他人をおとしいれたり傷つけたりするのは当り前といった考え方が一般的であって，金があればどんな人間をもいくらでも自由にすることができるということは，およそ貨幣が存在する社会であれば，未発展の資本主義社会でも，見られたことである。だが，最近の発達した資本主義社会では，貨幣への奴隷化は一段とすさまじいものになっている。金を儲けるためには，人間の生命を縮める薬品や飲食物の大々的売り出しや有毒廃棄物質のたれ流しなどは，紐つき官僚の黙認ものとでいくらでもまかりとおる。山道切開きや森林の濫伐による洪水や土石流による災害誘発は毎度のこと，原子力発電による大気汚染や大規模開発工事による自然環境，とくに海岸とその動植物の破壊など，金儲けに血眼の資本とその召使＝官僚どもにとっては物の数ではない。ただに自国のありとあらゆる自然環境と人間生活とを破滅に導くだけではなく，ひたすら巨額の利潤を狙って，発展途上諸国に資本を出して，そこでの人間と自然の野放図な搾取＝破壊を強行する，内戦に喘ぐ後進諸国に大量の武器を売りつけて殺し合いを煽動する。こうした全能貨幣の支配する帝

国主義諸国のうちでもとくに民主主義とは名のみで前期的遺物の支配するこの国のことである。そこでは，官僚も政治家も貨幣の奴隷となりはて，教育制度は貨幣＝資本の忠実な奴隷を養成するためのものに歪められ，文化も出版物も金儲けのためのものになりはてているのであるが，それはまた，理の当然というべきであろう。

このように貨幣が強大な力をもち人間がこれにふりまわされるみじめな奴隷に堕ちざるをえないところでは，その社会の成員は，私的所有のもとで必然的な個人主義・利己主義を最大限に守り活用しなければ，満足に生きてゆくこともできない。動物界にも見られない，浅ましい生存闘争は熾烈をきわめ，打ち負かして破滅におとしいれる闘争相手が多ければ多いほど，その人間は「成功」して，それだけますます大きな金を手に入れることを保証される。まともな人間らしい感情を身につけていては，人間にふさわしい生き方もできないこの社会！　人間は，貨幣をより多く手にいれるために，うわべは友誼的に愛想よく手をさしのべながら，ふところには相手をうち殺す刃をかくしていなければならない。ここでは，個人主義・利己主義は，その極限まで強化され，また深く浸透しているのであり，民主主義は，貨幣＝資本の利潤獲得＝支配強化のための道具立てとして，最大限に活用されているのである。

さきに本論稿の「前篇」および「中篇」においてつぶさに見たように，古典学派経済学のミルにはじまる俗流経済学も，たとえば「三位一体的定式」にあらわされているように，資本家階級，土地所有者階級および賃銀労働者階級という階級関係を前提し，それら諸階級の現質的基盤である諸収入を「理論的」に説明しようとしていたもので，その意味ではとにかく資本主義社会を構成する人間を取り扱っていたもの，それら人間の経済関係の「合理性」を説明したものであったといえる。だが，強大な独占＝金融資本の支配する最新の帝国主義段階では，経済学にとって，右のような階級関係の「合理性」を論証すること，それら諸階級の物質的基盤を説明することは，もはや問題とはなりえなくなったのである。唯一最大の関心事は，大資本にとって，いかにしてその利潤を極限まで増大させることができるかということを数式を用いて論究すること，そしてまた大資本に最大限の利潤を保証するために国家はその財政政策をいかに運用すべきであるかというその方策について，同じく数字をあやつってあれこれモデルを構築するという「研究」に移り変わったのである。数字や数式は，量的関係のみをとらえあらわすことはできるが，肝心の質＝質的関係はそこでは完全に抹殺されてこれっぽっちも表現されえない。質的関係，つまり階級関係が抹殺されること以上に御用学問＝俗流理論にとって喜ばしいこと，好都合なことはないのであって，俗流経済学はここにおいて，その頂点に達したものといわなければならない。こうした最新の御用学問＝俗流経済学は，本来の「経済」とはまったく無縁の純然たる観念的創作物であって，かつての古典学派経済学や旧俗流経済学のように，まともな「批判」に値するような代物ではまったくなく，資本主義的生産様式，それも独占＝金融資本の支配する資本主義社会の廃絶と同時に紙屑箱の中に放りこまれるべきものでしかないのである。独占＝金融資本の取得する利潤の増大とその支配体制の強化に奉仕する

ためにのみつくりだされもてはやされている貨幣物神に仕える奴隷たちの讃歌が，どれだけたくみに出来あがったものであろうと，その支配体制を——貨幣物神もろともに——廃絶する法則を解明すべき科学的経済学にとって，それが，いったい，どんな意味をもちうるものとなるであろうか？[19]

6　「経済学批判」の新たな展開の必然性

マルクス＝エンゲルスが科学的経済学をつくりあげ，革命的プロレタリアートの結集・組織に奮闘していた時代——19世紀後半——においては，資本主義社会の革命的変革＝社会主義社会の建設の事業は，未だ当面の課題として日程にのぼっておらず，将来の問題と考えられていた。しかし，変革後来るべき社会主義社会がいかにあるべきかという，いわばその基本的な見取り図は，かなり正確につくりあげられていたのであって，マルクスの主著『資本論』の中にも，この著作の本質からいって当然のことながら，新しい社会についての部分的叙述が見出される。しかし，より立ちいった見取り図としてしばしば引き合いに出されるのは，主として，マルクスの『ゴータ綱領批判』(,,Kritik des Gothaer Programms". 1891年公刊）とエンゲルスの『反デューリング論』(,,Anti-Dühing". 1984年）である。資本主義社会の変革後に建設されるべき共産主義社会についての基本的な見取り図は，この両者に比較的明確に示されており，社会主義社会について論ずるさいには必ずといってよいほど，その論拠としてこの二つが挙げられるので，つぎにもっとも重要と思われる叙述部分を引いてかかげておこう（……は省略部分）。

『ゴータ綱領批判』から。

「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では，生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは，生産物に支出された労働がこの生産物の価値として，すなわちその生産物にそなわった物的特性として現われることもない。なぜなら，いまでは資本主義社会とは違って，個々の労働は，もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである。……

ここで問題にしているのは，それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなくて，反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって，この共産主義社会は，あらゆる点で，経済的にも道徳的にも精神的にも，その共産主義社会が生まれ

19）わが国では，マルクス経済学といわゆる近代理論経済学との「折衷」を主張する「経済学者」が，敗戦いらい今日にいたるまでその跡を絶たず，なかには，マルクス経済学は「巨視的理論」を，近代理論経済学は「微視的理論」を，それぞれ専門としているから両者の「共存」をはかるべきだと主張する「専門家」まで出現している。こうした「専門家」は，たとえば地動説と天動説とを「折衷」し「共存」させようとするもので識者の憫笑を買うのが関の山である。まさに「万物は流転する」。資本主義社会の変革は一個の科学的真理なのである。

でてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。したがって個々の生産者は，彼が社会に与えたのと正確に同じだけのものを――控除したうえで――返してもらう。……個々の生産者は自分が一つのかたちで社会に与えたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである(ibid.Bd.19. S.19―20,訳19―20ページ，傍点―マルクス)。

「共産主義社会のより高度の段階で，すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり，それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち，労働がたんに生活のための手段であるだけでなく，労働そのものが第一の生活欲求となったのち，個人の全面的な発展にともなって，またその生産力も増大し，協同的富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧きでるようになったのち――そのときはじめてブルジョア的権利の狭い地平線を完全に踏みこえることができ，社会はその旗の上にこう書くことができる――各人はその能力に応じて，各人はその必要に応じて！」(ibid. S.21.訳21ページ)。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには，前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は，プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない」(ibid.S.28.訳28―29ページ，傍点―マルクス)。

『反デューリング論』から。

「社会が生産手段を掌握するとともに，商品生産も廃止され，それとともに生産者にたいする生産物の支配が廃止される。社会的生産内部の無政府状態に代わって，計画的意識的な組織が現われる。個人間の生存闘争は終りを告げる。これによってはじめて，人間は，ある意味で決定的に動物界から分離し，動物的な生存条件からぬけだして，本当に人間的な生存条件のなかに踏みいる。いままで人間を支配してきた，人間をとりまく生活諸条件の全範囲が，いまや人間の支配と統制に服する。人間は自分自身の社会的結合の主人になるからこそ，またそうなることによって，いまやはじめて自然の意識的な，本当の主人になる。これまでは，人間自身の社会的行為の諸法則が，人間を支配する外的な諸法則として人間に対立してきたが，これからは，人間が十分な専門知識をもってこれらの法則を応用し，したがって支配するようになる。これまでは，人間自身の社会的結合が，自然と歴史とによっておしつけられたものとして，人間に対立してきたが，いまやそれは，人間自身の自由な行為となる。これまで歴史を支配してきた客観的な，外的な諸力は，人間自身の統制に服する。このときからはじめて，人間は，十分に意識して自分の歴史を自分でつくるようになる[20]。このときからはじめて，人間が作用させる社会的諸原因は，大体において人間が望んだとおりの結果をもたらすようになり，また時とともにますますそうなってゆく。これは必然の国から自由の国への人類の飛躍である」(Marx-Engels Werke. Bd.20. S.264.訳292ページ，傍点―山本)。

共産主義社会にかんするこれらの特徴づけのうち，当面もっとも肝要と考えられる点をつぎ

20) さきにかかげた「唯物史観の定式」の末尾におかれた「前史」(die Vorgeschichte) という言葉の意味内容は，ここのエンゲルスの言葉によってよく説明されているのである。

に簡単にあげておこう。

a）生産手段の私的所有と個別的・私的生産は完全に廃絶，社会的所有のもと，すべて計画的な社会的集団的生産形態のみ。

b）商品，価値，貨幣は影も形もない。

c）共産主義社会の低い段階――これがいわゆる社会主義社会である――では，資本主義社会の遺した「経済的，道徳的，精神的母斑」のため，各成員はその労働に応じて等量の――必要な控除をして――労働量の生産物を社会から受けとる。各人の労働がきわめて高度で等質のものとなっていなければこうした計算は全く不可能であり，そのためには，全成員の労働力は資本主義のもとでよりはるかに高度に発達したもので，生産方法もすべて高度に機械化されたものになっていなければならない。

d）高い段階の，つまり本来の共産主義社会で「共同的富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧き」出て，「各人に必要に応じて」分配できるのは，各成員の労働力が全面的発展をとげており，限られた分業に縛られず，精神労働と肉体労働との対立もなくなり，労働が第一の生活欲求となっているからこそなのである。これらの条件がなければ，右の原則も，もちろん実現しえない。

e）低い段階の社会主義社会に到達するためには，旧社会の「母斑」，とくに個人主義・利己主義を各成員から完全に清算しきるだけにでも，多大の困難と根強い抵抗があり，そのために「プロレタリアートの独裁」という，強力が必要となる。各人すべてが「万人のため」社会のために奮闘するという精神を身につけるだけでも数世代が必要であることは疑いない。人間労働力の低度の発達，生産力水準の驚くべき低水準を見ただけでも，この過渡期がきわめて長期にわたることは明白である。世界史上最初にプロレタリア革命を勝利に導いたレーニンが，革命後その死にいたるまで，「ロシアは，いま，社会主義に向っての第一歩を踏みだしたばかりのところである」とくりかえしきびしくいましめたのは，まことに真相を正確にとらえたものというべきである。

これを要するに，新たな高度の社会を建設するための唯一の鍵は，社会的労働組織に組集され，個人主義・利己主義の観念を払拭して明確な社会主義的思想を身につけて社会変革に挺身する人間集団と規律あるその組織のうちにこそ在るのである[21]。

ところで，資本主義的生産は加速度的にめざましい発展をとげ，20世紀にはいって独占＝金

21）それゆえ，歪められた分業のもとで苦役を強いられ，個人主義に頼って生活を支えることを余儀なくされている勤労人民にたいして，その利己主義的観念の払拭と正確な社会主義的思想の把握のために献身的に努力することなく，ただ「社会主義になれば『労働に応じて』の原則が実現されるし，高度の物質的繁栄と広い民主主義が保障される」とか，「共産主義の高い段階では，生産力がすばらしく発展して，知的労働と肉体労働との差別が消え去るだけでなく，『各人には必要に応じて』の原則が実現されるであろう」とかいった宣伝に力をいれてもっぱら支持票をかきあつめることに専念する者があるとすれば，これほどあくどい反革命的ペテン師はまたとない，と言うべきであろう。

融資本の支配する帝国主義段階にすすむとともに，その内在的矛盾も増大・成熟をとげて，大規模な世界経済恐慌とさらに二次にわたる帝国主義世界戦争として爆発し，世界史はここに資本主義体制の崩壊と社会主義社会の新たな建設という新しい局面を迎えることになった。1917年のロシア革命，そして1945年東南欧諸国の人民民主主義革命，さらに1949年中国革命が，いずれも資本家階級と土地所有者階級の権力を打倒し，生産手段の国有化を基盤として社会主義社会への道を切りひらくこととなった。ロシア革命を指導したレーニンは，マルクス＝エンゲルスのうちたてた科学的経済学および科学的社会主義の理論を的確に把握してこれをロシアに正確に適用して，ソヴェト社会主義共和国連邦をつくりあげ，さらに社会主義社会の建設という未曽有の世界史的大事業に着手したのであるが，惜しくもその緒において倒れ，過渡期のかかえる重大な諸問題は，理論的にも実践的にもまったく未解決のまま遺されることになったものである。加えて，世界史にとってこの上なく不幸なことに，レーニンの後継者スターリンは，科学的経済理論も社会主義社会にかんするマルクス＝エンゲルスおよびレーニンの懇切・正確な教示をも学ぶどころか，これをふみにじって，もっぱら強力（ケヴアルト）を濫用して農業集団化その他の改造計画を強行したのであって，1936年には，なんと，労働者階級，農民階級および知識階級から成る階級社会ロシアはすでに社会主義社会であると宣言したものである。ところが，世界のほとんどすべての共産党・労働者党は，「偉大な指導者スターリン」の名に眩惑されてその露骨きわまる反マルクス＝レーニン的言動の正体を見分けることすらできず，なんと，歓呼・絶讃してその理論と実践をかつぎまわり，スターリンの妄論を並べたてた経済学教科書やその他の出版物を大々的に製造してひろめるばかりでなく，スターリンのやり口を真似てたちまち自国をりっぱな「社会主義国」だと宣言する国が相ついで出てきたのである[22)]。

ところが，歴史はまことに冷厳そのものであって，「スターリンの忠実な弟子ども」の妄想など，たちまちけし飛ばされ，きびしい現実が彼らの目と頭とを打つことになったのである。「社会主義」を自称する諸国では，その生産力は資本主義諸国に比べてはるかに低劣水準にとどまり，共産主義的思想はおろか，資本主義社会とまったく同じ個人主義・利己主義の強化・氾濫，投機の盛行，貨幣物神の支配という，まさに資本主義への後退・転落の様相を呈し，も

22) 1952年，スターリンの論文『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』が公表されたときの，ほとんどすべての国の共産党・労働者党の気ちがいじみた絶讃・讃仰と大々的宣伝について，そしてまた，この著作の中味がマルクス主義理論をひとつ残らず踏みにじり改ざんしつくしたこの上なく悪質な反革命的妄論のごった煮にほかならないということについて，私は，1982年から1984年にかけて，論稿『J.S.スターリンによる科学的経済学の変革――スターリン著「ソ連邦における社会主義の経済的諸問題」の検討』（全5篇）（愛知大学国際問題研究所『紀要』，第72,73,74,76,77号）を発表し，右の「スターリン論文」の理論的内容について詳細・厳密な検討を加え，その反マルクス主義的本質を徹底的に追求したものである。今日では，「大元帥」スターリンの正体そのものは白日のもとにさらされることになったが，かつて彼をかぎまわったすべての諸「党」も諸「理論家」も，相変わらず「自己批判」の一枚看板をかかげながら，かつての讃仰ぶりについては一言の自己批判すらなく，しかもその「大元帥」の反マルクス的妄論を相も変わらず後生大事と守り宣伝しているという体たらくなのである。

っともひどいところでは，個人的利潤の取得を株式投機によって保証して下さる国や，資本主義諸国を上回る破廉恥犯罪の猖獗というありがたい「社会主義国」まで出てくるという有様である。「資本主義国よりはるかに住みよい社会主義国」という，かつての謳い文句はどこへやら，いまでは「社会主義国よりはるかに住みよい資本主義国」というのが通り文句になる始末である。しかし，まこと「万物は流転する」。相変わらず「社会主義国」の看板をかかげ，スターリン直伝の反革命的似而非理論を正統マルクス主義理論として売り出しまた実践している「社会主義」諸国も，うちつづく生産力の停滞・低落を前にして，背に腹はかえられず，商品・貨幣流通からすすんで「利潤」獲得を大っぴらに認めた「自由化」という，まさに資本主義諸国の後塵を拝する方策に頼らざるをえないという事態がここに必然的に生まれたのである。

このような事態を前にして，想起されるのは，マルクスがかの「唯物史観の定式」のなかで明示しているつぎの命題である。

「一の社会構成体は，それが生産諸力にとって十分の余地をもち，この生産諸力がすべて発展しきるまでは，けっして没落するものではなく，新しい，さらに高度の生産諸関係は，その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは，けっして古いものにとって代わることはない」（前出，本稿145ページ）。

しかし，私たちは，この命題をそのまま暗誦するだけで，坐って時の来るのを待っていることは許されない。すでにそれらの諸国は，資本家・地主の権力を打ち倒して働く人民の権力をうちたて，生産手段の社会的所有を基本とする新たな社会を実現しているのである。もちろん，資本主義への後退＝復活は許されない。世界史が資本主義の時代から社会主義の時代へと巨大な転換をとげようとしているかにみえるこの段階における右のような事態を前にして，マルクス＝エンゲルスによってうちたてられレーニンによって継承され発展させられた経済学は，科学の名に値するものでありつづけるためには，はたして，どのような課題を，どのように解決してゆかなければならないのであろうか？　かつて「経済学批判」としてその世紀的意義を保持した科学的経済学にとって，その「経済学批判」の内容は，今日，どのようなものとしてその意義を保ちつづけることができるであろうか？

いま世界支配の新たな網を張りめぐらし強化しつづけている帝国主義国において，独占＝金融資本の支配体制の弁護＝「合理化」のために生みだされ盛行をみせている，新たな粧いをこらした俗流経済学にたいして，その本質を徹底的に究明し暴露するという，当然果されるべき課題については，ここで詳しく述べるまでもないことである。決定的なのは，いわゆる「社会主義国」における問題である。

資本主義的生産関係を廃絶して現在共産主義社会の第一段階である社会主義社会に向って，「ようやく第一歩を踏み出したばかり」の過渡期段階にあるこれらの社会にとって，なによりも肝要なことは，その置かれた現実の事態を厳密・正確に認識すること，そのためにマルクス＝エンゲルスおよびレーニンの共産主義社会にかんする理論を真剣かつ正確に学びとることで

ある。これらの科学的な理論を揺るぎない基本として，「経済学批判」は，理論と実践との二つの分野でその真価を発揮しなければならない。

まず，理論の分野においては，「社会主義のもとでも商品，貨幣があり，価値法則が貫ぬいている」という「大元帥」スターリン直伝の反マルクス的曲論を徹底的に批判し，これを完全に葬り去ること，これが第一の課題である。この批判は，当然に，いずれの「社会主義国」も「やっと社会主義に向って第一歩を踏み出したばかり」の最低段階にある事実の正確な認識と組びついて行なわれなければならない。つぎに，現実に存在する商品生産と貨幣流通について，その存在の根拠とそれらが経済的，道徳的，精神的分野に及ぼす作用・影響を的確に究明し把握しなければならない。商品生産と貨幣流通は，必然的に個別的・私的生産を助長し，貨幣物神の支配を強めるばかりでなく，個人主義・利己主義の浸透・強化を促し，貨幣を握る者とそれの乏しい者との階級分化を必ず生みだし，おのずと資本主義的生産への道を掃き清めずにはいない。これらの自然法則について，スターリン的たわごとを徹底的に批判し，その現実の事態を理論的に解明することは，「経済学批判」にとって緊急の課題である。

つぎに実践の分野での主要な課題は，商品，貨幣をいかにして追放して，真に正しい社会主義的諸関係の建設に向っての道を用意すべきかという問題を解決することである。ここで決定的な意義をもってくるのは，真に高い水準の社会的・集団的生産＝労働組織を完全につくりあげることである。全一的な社会的所有は，たんに社会主義のための基礎となるだけで，その上に社会主義社会が築きあげられるためには，なによりもまず計画的な整然たる社会的生産＝労働組織が高度の技術水準の上につくりあげられなければならない。しかし，そのためには，労働主体であるすべての人間＝労働者が，個別的・私的生産と貨幣物神の支配のもとでその身にかたく植えつけられた個人主義・利己主義的な観念と思想とをことごとく払拭して「一人は万人のために，万人は万人のために」という真の社会主義的観念と思想とをしっかりと体得しているものでなければならない。数世紀，いや数千年にわたって人類をつなぎとめてきた商品生産と貨幣流通による個人主義・利己主義的観念と思想とを清算するためには，人間は，どれだけの覚悟と努力が必要であろうか？　しかし，人間は，人間社会の仕組みと社会の経済的運動法則を理解し，そのなかで人間のおかれた地位と役割とを，とくにその当面の重大な歴史的任務について正しい理解をつかんだとき，いいかえれば，社会および人間についての正確な思態を身につけてその思想をかたく守って社会的実践に挺身するときに，はじめて，動物とはかけはなれた真実の人間の名に値するものとなる。そのときにはじめてその人間は「社会の主人公」の一人になることができ，はじめて人間社会の歴史を創る担い手の一人となることができるのである。こうして真の人間の名に値する労働者大軍をつくりだすために，その正しい思想の体得に向けて科学的経済学は，その「経済学批判」をば新たに，それこそ広く深く，浸透させ展開しなければならないのであり，そこにこそ，その負わされた実践的任務の正しい解決を見出さなければならないのである。

かつて1世紀まえ，エンゲルスはその名著『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』(1888年）の「まえがき」の結びにおいて，マルクスの遺稿『フォイエルバッハにかんするテーゼ』を挙げて，これについて，

「新しい世界観の天才的な萌芽が記録されている最初の文書として，はかり知れないほど貴重なものである」(Marx-Engels Werke. Bd.3. S. 264. 訳268ページ)

と述べて，これをその付録として公表したのであるが，そのテーゼの最後を飾る「11」に示された金文字はつぎのとおりである。

「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝心なのはそれを変革することである」(ibid. Bd.3. S. 7. 訳5ページ，傍点――マルクス)。

「世界を変革する（verändern)」――この世紀的な実践的課題は，いままさに科学的経済学の前に提起されているのである。その存立そのものを左右する唯一つの試金石として。

7　簡単な要約

本論稿のはじめに引用したように，わが国のほとんどすべての辞典は，「経済」という語について，それが「国を治め，人民を救うこと」を本来の内容とするものであるとの解釈を示していることをみたが，この「国」とは，もちろん，資本主義国家ではなく，人間社会の名に値する社会の総称にほかならず，また「人民」の内容も，真に人間の名に値する労働力の担い手としての人間でなければならないと解すれば，――そしてまた，そう解すべきであるとすれば，――この「国を治め，人民を救うこと」の具体的・歴史的な内容は，「真に人間社会の名に値する共産主義社会をうちたて，その成員一人ひとりを真に人間の名に値する高い労働力の担い手で明確な思想の持主として社会的に活動することを第一の生活欲求とする人間につくりあげる」ということにならざるをえないし，また，それ以外に該当する「社会」や「人民」が存しえないということは，疑いないところである。こうした理解の上に立つならば，「経済学」もまた，それに正しく対応して，動物にも劣る弱肉強食を事として，貨幣および資本の支配のもとに人間が食うために苦役しなければならず，資本家も利潤欲の奴隷となり果てている，この資本主義社会のからくりとそれの経済的運動法則を解明し，それによって真に人間社会の名に値する社会への変革＝建設の道とその歴史的偉業の担い手とについて，明確な指針を科学的に究明して，そのために人間がいかに行動すべきかを明示するものでなければならないということ，このことほど，明瞭なことはない。そして，このような真に科学的な経済学こそ，マルクス＝エンゲルスによってはじめて築きあげられた経済学であり，「経済学批判」であるということもまた，争う余地なく明白である。しかし，注意しなければならないのは，その科学的経済学は，「前史」の最後に位置する資本主義社会について，その内部的な仕組みを明らかにし，資本主義的機械制大工業の発展法則およびそこで搾取される大工業プロレタリアートの地位と歴史的役割を解明し，こうして資本主義社会の経済的運動法則を暴露したのであって，けっし

て，未来について「必要に応じて分配を受ける」ことのできる共産主義社会の幸せな状態を説いてひとを運動に引きいれるなどということは，まったく考慮にいれていないばかりか，こうしたやり方は厳に排斥するものだ，ということである。マルクスのすぐれた後継者レーニンは，マルクスの「われわれは世界に真の闘争の合言葉を与える」という言葉を引用するにあたって，それにさきだって，

「科学的社会主義は，近代ブルジョア制度の分析を与え，資本主義的社会組織の発展の傾向を研究することに――そして，それだけにとどめた。」(В. И. Денин, Сочнения. том 1. стр. 167. 邦訳大月版184ページ)

と述べて，幸せな未来の約束で人を誘導する愚をきびしく戒めたものである。なにより肝心なことは，主力部隊である大工業プロレタリアートをして，資本主義社会のからくりとその中での彼ら自身の地位と歴史的役割とについて確固たる思想を把握させ，資本主義的奴隷制度の廃絶と新しい人間社会＝社会主義社会の建設に向ってこの世紀的革命闘争のための組織をつくり，「闘争の合言葉を与える」ことにある。経済学はまさにそのためにこそ役立ちうるものでなければならないし，まさしくそこにこそその真の存在理由が存するのである。

あとがき

資本主義社会においては，そこの住民はひとりのこらず，商品，貨幣，資本，労賃，利潤，利子，地代といったものにたよらなければ生きることもできず，これらのものによってまさしく死命を制せられているというべきである。経済学は，これらのものをとりあげて当面の研究対象としているのであるが，しかし，これらのものの奥には一定の社会的関係のもとにある人間がおり，その人間の在り方，人間の社会的関係こそ肝心の研究対象であることを解明しえたときに，はじめて経済学は科学の名に値するものとなったのである。そして，右のさまざまな物的な諸形態規定そのものをつらぬく法則が，人間の社会的な生産関係を動かしこれを発展させ変化させずにおかないという社会的運動法則を究明したときに，経済学ははじめて，真に歴史科学の実をそなえたものとなったのである。

だが，科学としての経済学にとっては，たんにそれらの経済法則・発展法則を十分的確に解明するという課題が課せられているばかりでなく，さらに，現実の資本主義社会にこれらを適用してそこにそれらの発展法則が具体的にどのように貫徹しているかということを分析し，その資本主義社会のつぎのより高い歴史的社会への発展＝変革の諸条件とその移行過程のあり方とを正確に究明することが緊切な課題として提起されていることをつねに念頭におくことが大切である。この点で私たちがしかと銘記しておかなければならないのは，さきに引用したマルクスの金言――「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。しかし肝心なのはそれを変革することである」――である。科学としての経済学にとってその存否を決定する真の基準は，それが変革のための理論であること，いいかえれば，資本主義社会の社会主義

社会への移行＝変革の法則と諸過程とを正しく解明する科学でなければならない，ということである。

では，こんにち，資本主義から社会主義への世紀的移行のはじまった世界史の現段階において，科学的経済学は，そもそも，どのような発展をとげているといえるであろうか？

残念ながら，その現状は寒心にたえないものがあるといわなければならない。なぜならば，いまマルクス経済学の分野では，つぎの二つの潮流が支配的であるからである。その一つは，120年前のマルクスの草稿に照らして現行『資本論』の中のさまざまな命題のあり方をあれこれ論議することに終始するというものであり，他のひとつは，「社会主義社会に商品，価値，貨幣が存在するのは当然である」というスターリン直伝の反科学的命題を基本としてこれに「マルクス的」諸命題をくっつけてもっともらしい「体系」をつくりあげているというものである。しかも，これら二つの潮流が相互に「理解」しあって「共存」しつづけているという点が特徴的といえるのである。また，一般的にみて，いまの自称「社会主義」諸国を目して，それが文字どおりの社会主義国であるとする主張や呼び方を採用している向きは，――その無知を問わないとしても――すべて，意識的にか無意識的にか，科学的な経済学の完全な無理解とマルクス＝レーニン主義の基本のあからさまな無視とふみにじりをあらわすものにほかならないのである。こうしたまさしく反科学的・反マルクス的潮流の支配は，科学としての経済学をはじめとしてマルクス＝レーニン主義のすべての真実の内容，その真髄の決定的意義を認識してその正確な把握に努力することを惜しみ，簡単にこれを会得したものとする傲慢と思い上りとに結びついた，全くの不勉強によるものとしかいいようのないものである。マルクス＝エンゲルスおよびレーニンが精確に示している教示を刻苦して学びとることもせず，労働者・農民等の勤労人民の実際のあり方も理解することを惜しんで，どのようにして，働く人間が主人公である真の人間社会を築きあげることができるであろうか？

科学的経済学をみごとに体得し適用した真実のマルクス主義者レーニンは，60年前，「ソヴェトは，いま社会主義に向ってその第一歩を踏みだしたばかりのところである」とくりかえし強調し，雑多のボリシェヴィキ指導者たちをきつく戒めたものである。国家権力を労働者階級が掌握し生産手段を国家的所有に移すことができればそれで社会主義に成ったのだと早や合点する生まっかじりの「マルクス主義者」は掃いて捨てるほどいるが，実は，この二つは，そこにある旧社会をつくりかえて，あらたに社会主義社会を築きあげるために必要不可欠の要件であり，前提条件にすぎないのである。権力獲得後も，先進的な前衛組織にひきいられた労働者階級のほかに――旧支配＝搾取階級分子を別としても――多数の小市民階級ときわめて広範な農民階級が現存する。数世紀にわたって虐げられ抑圧され搾取されつづけてきた，後れた，因習にとらわれた勤労農民大衆の個人主義・利己主義的観念はたとえようもなく強固であり，権力者＝「お上（かみ）」にたいする不信・反感はこの上なく深く，保身のためにはありとあらゆる「手」をつかうという習性を身につけている。国民の圧倒的多数を占めるこれらの勤労農民大衆をば，

どのようにして，先進的な工業労働者とまったく同じように，進んだ自覚ある労働力の担い手に，集団的・共同的生産組織の積極的な構成分子として，みごとに社会主義社会の建設の一翼を担う決定的要素に，つくりあげることができるであろうか？

御用「マルクス主義者」＝へっぽこ経済学者は，口を開けば，「商品生産」と「貨幣流通」を規制し利用することによって，農民を集団的生産組織に組みいれれことができる，と言う。残念ながら，これらの諸君は，「商品」と「貨幣」とが私的所有（私的占有でも同じである）という生産関係に規定されたもので人間を支配する形態規定そのものであることがちっともわからないのである。いや，そればかりではない。「商品」と「貨幣」とは，本来共通の利益で結ばれている個人的生産者を相争い敵対する私的生産者につくりかえ，できるだけ多くの「貨幣」を握るためにありとあらゆる術策を弄することに専念させ，貧富の対立を拡大し，ついには労働力をも「商品」として売買せざるをえないという――隠然・公然たる――事態を生みださないではおかないのである。

「商品生産」と「貨幣流通」を正しく運用し規制して，ついにはこれらをまったく「清算」しつくすという成果が達成されるまでにはそこにどれだけ克服困難な問題が限りなく伏在していることであろうか。そしてまた，それらの正しい解決のためには，どれだけ長い期間にわたっての，どれだけ複雑・適切な指導と施策が要求されることであろうか？

さらに，商品・貨幣そのものが勤労人民の個人主義・利己主義を抜きがたく強固にするのは必然であって，その個人主義・利己主義を共同的・社会的観念におきかえるなどということはきわめて困難である。ほとんど唯一ともいうべき傑出したマルクス主義者レーニンは，この後れた勤労農民大衆をどのように改造して社会主義建設の決定的な積極的担い手に仕上げるべきかという緊切な問題に直面して真剣に考慮して主要な方策を練ったものであるが，世界史の進展にとってまことに惜しくも，その中途で倒れ，その理論も政策も中途で挫折せざるをえなかったのである。この勤労農民大衆のいわば社会主義的改造の問題については，いずれ別稿で考察することとして，ここではそれについて，ただ一点だけ，これまでの拙論で説いたところとの関係で，ここに補足しておきたいと思う。それは，勤労農民大衆がいわばそれにしばりつけられている個人主義・利己主義的観念の払拭の問題である。これらは，「上」からの強力的施策によってはけっして除去できるものではないし，宣伝によって簡単に共同的意識によっておきかえられるものでもけっしてない。レーニンのような，人間的にも学問的にもすぐれた真実の指導者の集団が，農民大衆の生活状態・生産諸条件をただしく把握して，さまざまな国家的施策・援助を通じて，その個人的生活・生産条件を――できるだけ集団化・共同化の方向にむけて――改善するという方法で，つまり，いうなれば，その個人的利益を集団的利益と重ね合わせるという方法によって適切にまた根気よく指導をおしすすめてゆくならば，たとえ，驚くほど長い期間を要するとしても，かれらの意識と生活・生産条件の根本的改造はついにはなしとげられるであろうと考えられるのである。

ただ残念なことに，レーニン亡きあと，同じ革命的前衛組織を名のる世界各国の指導層は，理論的にみても，人間的にみても，真実の前衛の名に値する実体をそなえているものはほとんど見当らない。それらはすべて，かの反革命的頭目スターリンの有名な論文を絶讃・歓呼して迎えるばかりか，いまもってその迷論をひけらかして得意になっているという点でその理論水準がこの上なく低劣俗悪なものであることを実証しており，また，今日明らかとなっている世紀的屠殺者スターリンに盲従しこれを担ぎまわって世界の勤労人民大衆を欺瞞し愚弄しつくしたことにたいして一言の自己批判も公けにしようとしない点で，申し分なくその品性の下劣で裏切的であることを動かしがたく立証しているのである。もしも，こうした有名無実の前衛諸党が，その品性にふさわしく権力を独占して強力にたよって広範な人民を「指導」することでその「徒党的」利益の温存・確保につとめるとしたならば，はたして，世界史の発展は，どのような方向を辿ることであろうか？

科学的な経済学に正しく取り組み，これを真に発展させることをねがう人々にとって，いまや提起されている緊切な課題はつぎのようなものであると私が述べたとしても，読者諸君はおそらく，これをおこがましいこととしてむげには排斥されないであろう。それは，科学的な経済学の真髄，すなわち，資本主義社会の社会主義社会への発展＝移行の法則の内容を精確に把握してこれをできるだけ広範な勤労人民大衆に周知徹底させること，そして，この法則を具体的に適用して真実の変革のための道を解明するとともに，その変革のための主体的勢力をただしく築きあげ，それが正しく実践するための方途を明示することができるよう，そのために微力をつくすこと，これである。　（完）

（1989．3．28）